

資料紹介

県令の交代をめぐる新聞記事～2代奈良原繁から3代関口隆吉へ～

はじめに

平成21年度、静岡県立中央図書館は国民文化祭開催と初代県知事関口隆吉没後120年にあわせて、『関口隆吉関係書簡集』を刊行した。関口隆吉は1884(明治17)年9月27日に第3代静岡県令に就任し、1886年の地方官制公布により初代県知事となった。関口隆吉は江戸生まれだが、父隆船が佐倉村(現御前崎市)の池宮神社祠官佐倉氏出身であり、隆吉自身も維新後、静岡藩の公用人を務め、1870年には金谷開墾方頭取並として佐倉村に近い月岡村(現菊川市)に居を構え、開墾事業にあたった¹⁾。このように本県に縁のある関口の県令就任は、当時の「地方の令は他貫の者を充当する」ルールから逸脱した異例な人事であったという^{1) 2)}。以下に関口が県令に就任した当時の新聞記事のいくつかを紹介する。これらの新聞については県立中央図書館、歴史文化情報センターで閲覧できる。

社説「県令之交代」

1884年9月28日付の『函右日報』(以下、『函右』)、『静岡大務新聞』(以下、『大務』)では、昨日27日をもって2代県令奈良原繁³⁾が工部大書記官に転じ、元老院議員だった関口が新県令に就任したと報じている。これ以前の当月の両紙には、奈良原が県令から転じていづれ日本鉄道会社社長に就任する風説があるという記事がみられる⁴⁾が、関口県令を予想する記事は確認できなかった。なお、9月28日付『大務』は奈良原がいったん工部大書記官となってしばらくして日本鉄道会社社長になることに触れている。実際、奈良原は同年10月、日本鉄道会社社長に就任した⁵⁾。

9月30日付、10月1日付『函右』に、社説「県令之交代」が掲載されている。在任約9ヶ月の奈良原前県令の功績を挙げながら、その転任は「愛惜悲嘆」「憂苦ノ情ニ堪ヘサルモノアリ」とし、その「憂苦」を償うものとして関口県令の就任に期待している。また、「按スルニ県令ノ昇進者ハ概ネ元老院議員ニ転スルヲ常トス、関口君ノ如キ亦タ其一ニ居ル、然レドモ議員ヨリ出テ、県令ニ任スル者ハ殆ント稀ナリ、否ナ余輩ノ記憶ニ依レハ絶ヘテ其例ナキカ如シ、今ヤ関口君ハ元老院議員ヨリ出テ、県令ト為ル、其事稍ヤ疑フ可キニ似タリ」と述べ、関口が山口県令から元老院議員となったことは一般的だが、元老院議員が県令に就任することは極めて異例であり、そのような人事に違和感を抱いている。その上で社説は、本来、地方自治制度における地方官は英米諸国にならって「人民ノ公選」で「府県内ノ人物を登庸」すべきであるとしている⁶⁾。「関口隆吉君ハ…其ノ静岡県ヲ思ヒ静岡県人ヲ愛スルノ情ニ至テハ稍ヤ他ニ越ユル所ノモノアラン…政府ノ特ニ君ヲ挙ケテ本県ニ令タラシムル所以ノ意或ハ此ニアラセルナキ乎」、「君ノ就任ヲ以テ我カ県人ノ為メニ甚タ賀ス可キノ事」と述べている。もちろん関口も官選であるが、静岡県に縁のある人物が県令になることを好意的に受けとめた社説である。

新旧県令送迎会

人事発令時に上京中だった奈良原は、新県令関口と途中で合流してともに来静したことが『函右』『大務』両紙からうかがえる。10月8日付『大務』には両人が富士の沼川工事を巡見した記事がある。

新旧県令同席の送迎会が10月9日と11日に開催された記事も両紙にある。10月11日付『函右』によれば、9日の送迎会は両替町の芙蓉楼で静岡市街の戸長、銀行、新聞関係者等を「首唱者」として開催され、180余名の来会者があったという。11日は永峯彌吉大書記官が主催して、<表1>のように5会場で開かれ、316名の来会者があり、新旧県令は會鶴楼(『函右』では會鶴亭)、求友亭、富士見亭、清泉楼を廻り、最後に芙蓉楼(『函右』では磯馴)に臨んだという。10月14日～16日付『函右』には、各会場ごとの出席者氏名が掲載されている。1884年8月発行の『静岡県職員録』⁷⁾と照合すると、十七等出仕以上の県吏員、警部、警部補、収税属、監獄関係者、郡長等の多くが出席している。

多彩なメンバーが集まったとみられる磯馴(『大務』では芙蓉楼)の出席者のみ<表2>にまとめた。当時の各界の名士が新旧県令の送迎会に出席していることが分かる。

<表1> 10月11日送迎会会場内訳(10月12日、14日付『大務』より)

会場名	出席者の構成
會鶴楼(『函右』では會鶴亭。両替町)	判任以上の県官
求友亭(両替町)	県会議員、県官、警察官、郡書記
富士見亭(両替町)	警察官、県官、収税官
芙蓉楼(『函右』では磯馴。両替町)	裁判官、検事、各課長、各郡長、医員、銀行役員、内務省土木局出張官電信分局官吏、駐在官、在野紳士、金谷原土族、沼川石水門工事係、社山工事係、三方原百里園長、新聞記者、山林局員、警察官
清泉楼(江尻町)	富家豪農、郵便局員、同胞会員

<表2> 10月11日送迎会 磯馴(芙蓉楼)出席者(10月14日付『函右』より)

出席者名	人物事典等	備考	出席者名	人物事典等	備考	出席者名	人物事典等	備考
安原吉政		**静岡始審裁判所判事長	近藤準平	ABCEJM	**志太益津郡長	尾崎伊兵衛	EM	
増田賛		**静岡始審裁判所判事長	河村八郎次	A	**榛原郡長	林吾一	E	**静岡師範学校校長兼中学校長
岡野正理		**静岡始審裁判所検事	池田忠一	AD	**佐野城東郡長	森理七		
杉山叙		**収税長	足立孫六	ABCLM	**周智郡長	伊藤忠右衛門	B	
桑名茂三郎		**農商務省山林局三等属	西尾伝蔵	ABCEHM	**豊田山名磐田郡長	高田宜和	ACI	
伊藤鉞五郎	D	伊東鉞五郎か	青沼沃	D	**長上敷知浜名郡長	中條景昭	ABCDEM	
稲田秀實			松嶋吉平	ABEM	**龜玉引佐郡長	大草高重	ADEM	
小泉武謙	D	**会計課長	笹間洗耳	DEM		寺田彦八郎	ACHM	
蜂屋定憲	ABCDE	**学務課長	出嶋竹齋	ACEFM		寺田彦太郎	ABCHM	
高尾玉敷明		**警部(警察本署)	猪原吉郎	CEL		林彌十郎	CE	
松田寅卯		**土木課長	大川宗炳	EM		野末某		横田茂平(CM)の代理
近藤軌四郎	E	**衛生課長	柏原学而	ABCDEMN		横田保	ABCM	
都留田守			前田五門	ADEM		気賀半十郎	ABM	
小林治		**調査課副長	前嶋格太郎	EM	豊太郎の子。攪眠社	池谷繁太郎	ACKM	
大野恒哉	BCEM	**賀茂那賀郡長	津田與二		静岡大務新聞	玉木辨太郎		*工部省電信局八等技手
岡田直臣		**君澤田方郡長	山田義實	D	小林年保(BCDE)の代理	尾花光普		*工部省電信局八等属
河野鎗次郎	M	**駿東郡長	横田保兵衛			松岡歸之		
石原幸正	DM	**富士郡長	野崎彦左衛門	ABCEM		岡田勉治		
吉川宜英	ACI	**庵原郡長	佐倉信武	ABCG		矢部與作		
星野鐵太郎	B CDM	**有渡安倍郡長	宮崎給吾	ABCEFM	宮崎給五			

・会場の接待委員となった6人の県吏員は除いた。
 ・人物事典等出典は以下の通り。 A:『静岡歴史人物事典』 B:『岳陽名士伝』 C:『静岡県人物志』 D:前田匡一郎『駿遠に移住した徳川家臣団』 E:『ふるさと百話』 F:『静岡県安倍郡誌』 G:『静岡県小笠郡誌』 H:『静岡県磐田郡誌』 I:『静岡県庵原郡誌』 J:『静岡県浜名郡誌』 K:『静岡県富士郡誌』 L:『静岡県周智郡誌』 M:『静岡県史』通史編5 N:『静岡県史』資料編1
 ・備考欄の*を付した肩書は「明治十七年五月改正官員録」「明治初期の官員録・職員録」第五巻より。**を付した肩書は『静岡県職員録』1884年8月発行より。

奈良原前県令の回顧

奈良原前県令は、10月14日付『大務』『函右』によると、10月13日に静岡を發ち、上京の途に就いた。10月25日付『函右』には奈良原自身が静岡県令時代をふりかえった談話が掲載された。「余は元来土木の事には至極執心」し、自身の関わった土木事業計画として「社山開鑿、清水築港、四大川堤防、沼川石水門」をあげ、これらの事業途中での今回の転任は遺憾ではあるが、「沼川石水門丈は此ほど大抵落成したり…去る十五日の暴風雨の際に於て同水門は毫も破損等の事なかりしかば人々も今は安堵して其堅牢を賞するほどなり」と述べている。これら事業の多くは関口県政に引き継がれ、推進されていくこととなった。

- 1)近藤啓吾「関口隆吉小伝」(『明治初期名士書簡集』)
- 2)天野忍「関口隆吉と『久能文庫』」(『関口隆吉関係書簡集』)
- 3)薩摩藩出身。元老院議官、貴族院勅撰議員、宮中顧問官、沖縄県知事などを歴任した。なお、初代静岡県令大迫貞清も薩摩藩出身である。
- 4)『函右』1884.9.9、『大務』1884.9.12
- 5)『日本鉄道史』上篇756頁
- 6)1947(昭和22)年の地方自治法成立で都道府県知事は公選となった。それまでの県令、府県知事は中央政府から任命された。
- 7)歴史文化情報センター架蔵資料。請求番号17033-41-g188